

2018年12月8日(土) / 前橋市・群馬県公社総合ビル

社会貢献がつなぐ未来 ～地域人材と地方創生～

2018年度の「社会貢献フォーラム」は、群馬県前橋市で開催された。第1部では、双子の兄・健司さんとともにスキージャンプ複合選手として活躍し、現在はスポーツキャスターを務める荻原次晴さんのトークショー、第2部では群馬県内で行われている様々な社会貢献活動の事例を紹介しながら、地域を支える人材をどう育て、地域の活性化につなげていくかをテーマとするフォーラムが実施された。会場には約260人の市民・県民が詰めかけ、熱心に耳を傾けていた。フォーラム終了後には荻原次晴さんのサイン入りグッズなどが当たる抽選会も開かれ、大いに盛り上がった。

主催：

全日本社会貢献団体機構、上毛新聞社、全国地方新聞社連合会

後援：

群馬県、群馬県教育委員会、前橋市、前橋市教育委員会、NHK 前橋放送局、群馬テレビ、エフエム群馬、共同通信社、全日本遊技事業協同組合連合会、群馬県遊技業協同組合



第1部 トークショー

次に晴れば、それでいい

村松さん 萩原次晴さんといえば、ソチ五輪のノルディック複合で渡部暁斗さんが銀メダルを獲得したときにテレビ解説で大号泣したシーンが忘れられません。今日はお会いできて光栄です。双子の兄弟でお兄さんである健司さんとは、どういう関係だったのですか？

萩原さん 最初は僕のほうが成績はよかったです。全国大会に行ったのも僕が先で、健司はそれが悔しくて猛練習して、あれよあれよという間にオリンピックの金メダリストになった。

村松さん まあ、どっちがどっちかわからない(笑)。

萩原さん どっちでもいいんです。自分ができなかったことを健司がやり、健司ができなかったことを僕がやればいいというのが、今の二人の役割です。でも、僕が勝手に心を閉ざしていただけですが、一時期、二人の関係がぎくしゃくしたときがあった。1992年のアルベールビル五輪の団体で金メダルを取り、健司が時の人になった。どこへ行っても僕は健司に間違えられる。サインや写真撮影を求められ、「僕、弟の次晴です」と言うと、「チェッ」とか、「何だよ」と

萩原次晴さん(スポーツキャスター、元ノルディック複合選手)

か、がっかりされる。これは人間の尊厳に関わる問題で、僕は健司や双子に生んだ両親を恨みました。いつか自分も絶対オリンピックに出てやると思って、98年の長野五輪にぎりぎり間に合った。調子が悪いまま本番を迎え、日の丸を持った3万人の観客を前に、「失敗したらどうしよう。日本に住めなくなる」とネガティブになりました。

村松さん えっ、そこまで考えたんですか？

萩原さん 結構、きつかったですよ。でも、こうなったら頭から突っ込んでやれと思ってジャンプを飛んだら、期待されていた健司よりも遠くまで飛んで、入賞を果たすことができました。そのおかげで健司と間違われることはあっても、「チェッ」と言われることはなくなりました。

村松さん 今はお兄さんよりもテレビにたくさん出て、お兄さんが「チェッ」と言われているんじゃないですか？

萩原さん 今、健司は指導者なのでほとんどテレビに出ることはない。東京駅でサインを求められたので、いつものように「萩原健司」と書いたら、「えっ、次晴さんじゃないんですか?」と言われました(笑)。



出席者プロフィール



萩原次晴さん
スポーツキャスター
元ノルディック複合選手

1969年、群馬県草津町生まれ。世界選手権で団体金メダル、長野五輪で入賞。引退後はスポーツキャスターとしてメディアに多数出演。オリンピックの一人として、広くスポーツの普及に取り組んでいる。「次晴登山部」を発足し、日本百名山登山を目指している。



大森昭生さん
共愛学園前橋国際大学
学長

1968年、宮城県仙台市生まれ。東北学院大学文学部英文学科、同大学院博士課程にて研究。2016年より現職。群馬県青少年健全育成審議会会長など、地域における各種公的委員を務める。全国の学長が注目する学長ランキング3位(「大学ランキング2019」)。



森山秀夫さん
群馬県遊技業協同組合
理事長

1951年、兵庫県出身。2003年、「(株)AICホールディングス」代表取締役就任。18年、群馬県遊技業協同組合理事長就任。全日本遊技事業協同組合連合会理事。社会貢献の重要性を業界内に浸透させ、継続した様々な社会貢献活動を推進している。



関口雅弘さん
上毛新聞社
取締役編集長

群馬県高崎市出身。慶應義塾大学法学部政治学科卒業。1983年、上毛新聞社入社。編集局報道部長、総務局総務部長、役員室長、編集局長、編集主幹兼論説委員長などを経て、2018年6月から現職。NIB推進委員長を兼任。



村松真貴子さん
コーディネーター
アナウンサー・エッセイスト

東京都出身。武蔵大学人文学部卒業。SBS静岡放送アナウンサーを経てフリーとなり、「イブニングネットワーク」などNHKの番組を担当。現在はNHK文化センター、NHK学園講師。講演や朗読活動を通じて地域活性化に尽力。全国公民館連合会理事。

共愛学園前橋国際大学のみなさん

新井竜也さん(3年)
「みなかみ町学習支援教室 Swallow Pick」

安済茜さん(3年)
「環境ネットワークキャンパスに参加して学んだこと」

第2部 パネルディスカッション

地域が支える子どもの未来～スポーツとあそびで育む心と絆～

村松さん 群馬県内で今、どのような社会貢献活動が行われているのかご紹介しながら、地域と人材の関わり、特に若い人材を育み、地域を活性化するにはどうしたらいいか、パネリストの皆さんと一緒に考えて議論していきたいと思います。

大森さん 共愛学園前橋国際大学では地域と大学が一体となって、地域人材の育成に取り組んでいます。ここ数年でも本学の学生は地元定着が進み、約9割が県内出身で、約8割が県内に就職しています。地域から学生をお預かりし、地域の皆さんと一緒に育て、地域にお返ししていくというのが本学のミッションで、2018年から「地域の未来は、わたしが創る」をキャッチフレーズに掲げています。今日は2名の学生(新井・安済)に、地域での活動について発表してもらいます。

新井さん 共愛COCOは学生が地域と関わることによって地域を元気にすることを目的とした団体で、地域課題

の発見と解決、みなかみ町をPRすることを理念に掲げて活動しています。みなかみ町藤原平出という高齢化が進む中山間地域でのお年寄りの農業の手伝い、戸別訪問、除雪作業などの活動実績がみなかみ町社会福祉協議会に認められ、「みなかみ町学習支援教室 Swallow Pick」が始まりました。福祉的な支援が必要な中学生を対象に、学力向上と精神的サポートを目的に、毎週土曜日に個別指導を実施しています。小さい時に地域に支えられて育った子どもは、大人になった時に地域に何かしてあげたいと考えるのではないかとという視点で、将来的に地域貢献できる子どもを育てていると考えています。地域に関わることによる私たち自身の学びとして、インプットとアウトプットの繰り返しによるスキルアップがあり、さらに地域を他人事ではなく、自分事として考えることができるようになりました。

安済さん 私が参加した「環境ネットワークキャンパス」は、



萩原さん 当面の目標は、2020年東京オリンピックのキャスターの座をつかむことです。スポーツキャスターには強力なライバルがいますが、熱いキャラクターは誰かにお任せして、僕はミディアムホットぐらいのスタイルで行こうと思っています。(聞き手:村松真貴子さん)

群馬大学、高崎経済大学、早稲田大学、本学の学生が地元の空調システム会社サンデンHDの若手社員と協力して、地域の課題や環境問題に取り組む活動を行っています。全体で取り組む震災復興プロジェクトでは、宮城県東松島市にある森の間伐や津波で荒廃した土地をグラウンドに整備する作業を行いました。チームで取り組む環境教育プロジェクトでは、子どもたちの環境意識を高めることを目的に、風力発電を体験してもらうワークショップ、発電の種類、資源の有限性、再生可能エネルギーの重要性などを学んでもらう環境教育を行いました。こうした活動を通して、課題解決力、チームワーク、主体性といった社会人基礎力が身に付いたうえ、地元群馬への愛着や地域づくりへの関心が生まれました。将来は群馬に貢献できるような仕事に就きたいと思っています。

村松さん 地域の問題を自分事化して考えるようになったという言葉はとても心に響きました。では次に、群馬県遊技業協同組合や傘下のパチンコホールなどが行っている社会貢献活動についてご紹介いただきたいと思います。

森山さん 平成8年に県内遊技場で発生した「ゆかりちゃん誘拐事件」に関して、犯人検挙に協力するため捜査特別報奨金300万円の提供、新聞への情報提供の呼び掛けポスターの掲示、さらに警察と合同で街頭でのチラシ配布や呼び掛けなどを行ってきました。また、安全で安心して暮らせる地域社会の実現に向け、県からNPO

法人の認定を受けた「安心安全憩いのまちづくり」による青パトでの小学校周辺の防犯パトロールや暴力団排除活動のほか、高齢者の利用が多い業界の責務として、発生に歯止めがかからない特殊詐欺対策にホール店長など25名が講座を受講し、振り込め詐欺等根絶サポーターに認定されました。さらに振り込め詐欺の注意を喚起するハガキの郵送、新聞折り込みチラシへの掲載を実施しています。保健医療福祉関連では高齢者福祉施設への車いすの寄贈、児童養護施設等への寄付、生活困窮者児のサーカス招待、災害救済として熊本地震被災者への義援金の寄付も行いました。

村松さん 幅広い分野で社会貢献をされているのがよくわかりました。では、上毛新聞社の関口さんから県内で行われている社会貢献活動についてご紹介いただきます。

関口さん 世の中が色々と変わる中で行政も手の届かない課題が結構多いのですが、住民が社会貢献に取り組む団体としてはNPO法人が知られ、群馬県内でも「健康、医療または福祉の増進」「まちづくりの推進」「学術・文化・芸術・スポーツの振興」「子どもの健全育成」「環境の保全」などの分野で852団体が活動しています。今日はそうした取り組みの中から一つの事例として、子どもが病気で保育園や幼稚園に通えず、親も仕事を休めないときに子どもを預かる病児保育についてお話してきたらと思います。県内では今、病児保育施設が徐々に整備され

つつありますが、都市部以外では未整備地域が多い。一人のシングルマザーが未整備地域の地元の市長に送った病児保育施設の設置を求める手紙が公開されていますが、この問題は行政だけで解決できるものではなく、子育て支援の充実という観点からも、医療機関、保育関係者、住民の協力を含め、地域全体で考えていかなければいけない問題だと思っています。

村松さん 働く女性が増え、子育てしやすい社会の基盤を整えることも地域を元気にするために必要だと思います。森山さんは社会貢献活動に携わって、何か変わったことはありますか。

森山さん すべての国民が幸せに暮らす権利を有しています。それは国家や社会システムが責任を持って取り組むべきことですが、手が届かない部分があります。そこに民間や地域住民が手を差し伸べることが重要ではないかと思っています。その一人として私もお役に立ちたいという思いを強く持っています。幸せのもう一方には必ず悲しみがあり、笑い声の対極には涙がある。自分が幸せであればあるほど、対極にある不幸せに思いを馳せ、社会的弱者に対する思いやりを持つことが大事だと思っています。

大森さん そのようなマインドを持った人を育てていくことも地域貢献になるのではないかと思います。地域に貢献しようとする社会性の高い人間のベースにあるのは、自分が必要とされている、自分が役立っているという自己有用感です。そうした感覚を育むためにも社会貢献活動は非常にプラスだと思います。様々な地域で今、多世代間交流がキーワードになっていますが、若者が地域の異なる年代の方々と交流することで結果的に地域に対して愛着を持つようになります。学生たちと一緒に地域で様々な取り組みを行っていますが、地域と関われば関わるほど若い人たちが地域を好きになってきます。ですから若い人にもっとも期待をしてもいいかなと感じています。

森山さん 地域の人材は地域社会が育てるべきものだと思います。大学にしろ、企業にしろ、地域の宝物である若者をお預かりし、その原石をダイヤモンドに磨いて地域社会にお返しする、そういう循環が行われる地域社会が素晴らしい社会ではないかと思っています。

大森さん 若い人たちを受け入れることが結果として彼らを育てることになり、それが地域貢献につながっていくと

いうことで、受け入れを躊躇せず、次世代の地域の人材と一緒に育てていながら、みんなで地域の未来を創っていただければと思います。

荻原さん 今日のような難しいテーマにもかかわらず、これだけの方々が集まりになったということは、ふるさと群馬の皆さんがそれだけ郷土を愛し、地域の未来に興味を持って熱心に勉強されていることの表われだと感じました。自己有用感というお話が出ましたが、私たちは人のためになった時に、嬉しさや喜びを感じるということかもしれません。オリンピックに出場して嬉しかったことは、僕はただ自分の夢のためにチャレンジしているのに、その僕の姿を見て、「不登校だったけど学校に行きます」とか、「家出していたけど家に帰ります」とか、「手術を受けます」とか、「自分も頑張ろうと思った」という内容のお手紙を沢山いただいたことです。それはまさに自己有用感だと思いますが、自分の活動が地域のためになっていると思えば、幸せなことですね。

村松さん こういうことをしたら役に立つかもしれない、こういうことをしたら喜んでもらえるかもしれない、そんな温かい思いが暮らしやすい地域社会を創っていくのだと思います。このフォーラムが社会貢献活動参加のきっかけになればいいと思います。

地域貢献の可能性や社会貢献の効果を業界で研究・再検討する必要性を痛感

群馬県遊技業協同組合理事長 森山秀夫さん

今回のフォーラムは大変盛況裏に終わり、想像以上の成果を得られたという印象を持ちました。今回のようなテーマに遊技業界も積極的に関与しなければならぬのですが、地元の学生の人材採用などは大手ホールは可能ですが、中小のホールにとっては力不足が否めません。群遊協としては、国民、県民の支持があってこそその遊技業界という観点から、こうしたテーマについて何が可能なのか研究していきたいと思っています。また遊技業界の社会貢献の費用対効果について、新しい時代環境に即して再検討してみる必要があると痛感しました。

